

北太平洋と日本におけるさけ・ます類の資源と増殖

さとう えくお
佐藤 恵久雄（企画課情報係長）

2000年の北太平洋

漁獲数

第9回NPAFC年次会議における各国の報告によると、2000年1-12月の北太平洋の漁獲数は3億3,400万尾で、前年の4億5,200万尾より26%減少しました。地域別ではアラスカ州で1億3,900万尾と最も多く、以下ロシア1億2,700万尾、日本5,900万尾、カナダ800万尾の順で、魚種別に見るとカラフトマスが2億700万尾（62%）と全体の2/3を占め、次いでサケが7,700万尾（23%）、ペニザケが4,300万尾（13%）と続き、これら3魚種で99%を占めています（図1A）。

人工ふ化放流数

2000年1-12月に人工ふ化放流された幼稚魚数は47億5,000万尾で、前年の46億7,000万尾に比べ2%増加しました。地域別では日本が19億7,000万尾と最も多く、以下アラスカ州14億8,000万尾、ロシア6億7,000万尾、カナダ3億1,000万尾と続いています。魚種別ではサケが27億7,000万尾で半数以上を占め、これに次ぐカラフトマスの13億7,000万尾と合わせると全体の9割を占めます（図1B）。

2001年度の日本

サケ

2001年度の沿岸来遊数（沿岸海面での商業漁獲と内水面での親魚捕獲の合計）は12月31現在で5,800万尾、前年度同期比で132%となっています。沿岸来遊数は1996年度に過去最高を記録して以来、4年連続で減少していましたが、2001年度は前年度最終数4,400万尾を既に大きく上回っており、残る1-2月分を加えると6,000万尾程度に達すると思われ（図2）。

これを道府県別にみると、太平洋、日本海とも南の府県のほうが前年比で大きく伸びる傾向がうかがえます（図3）。

一方、海区別にみると、北海道は日本海で15%減少したのに対し、他の4海区は30%以上の高い伸びとなりました。また本州では、太平洋が前年よりは増えたもののいまだ低い資源水準にあるのに対し、日本海では4年連続の増加となり最近10年間でも上位に位置する結果となりました（図4）。

なお、採卵数は既に21億7,000万粒を確保し、計画数21億3,000万粒を満たしていることから、放流数もほぼ計画どおり18億3,000万尾程度と見込まれます。

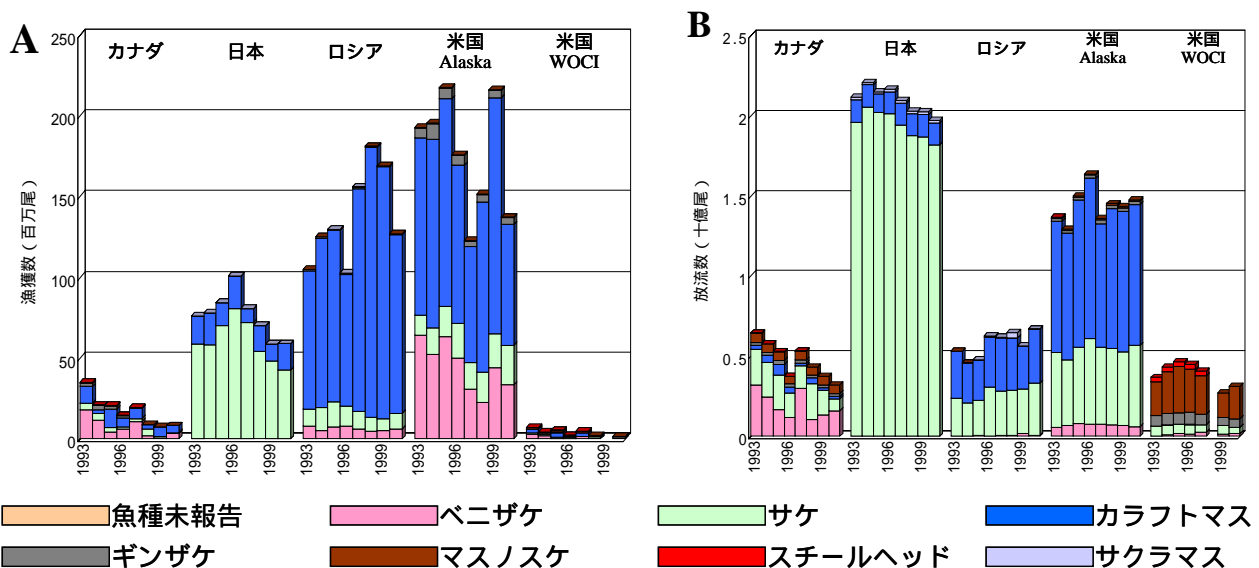


図1. 1993-2000年の北太平洋におけるさけ・ます類の地域別魚種別漁獲数（A）と人工ふ化放流数（B）。1993-1997年は「NPAFC Statistical Yearbook」による商業漁獲数の確定値だが、1998年以降はNPAFC年次報告等で示された暫定値である。ロシアにはEEZ（排他的経済水域）で他国が漁獲したものを含む。WOCIはワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州の合計。WOCIの一部は当該年のデータが未報告のため示していない。

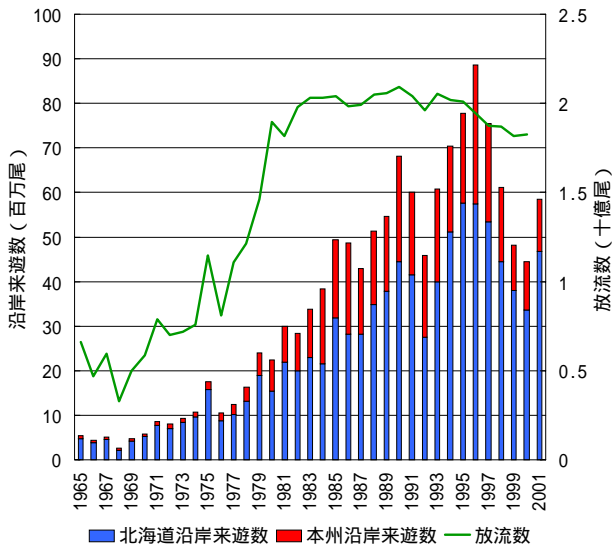


図2. 1965-2001年度の日本におけるサケの沿岸来遊数と人工ふ化放流数。2001年度は12月31日現在。

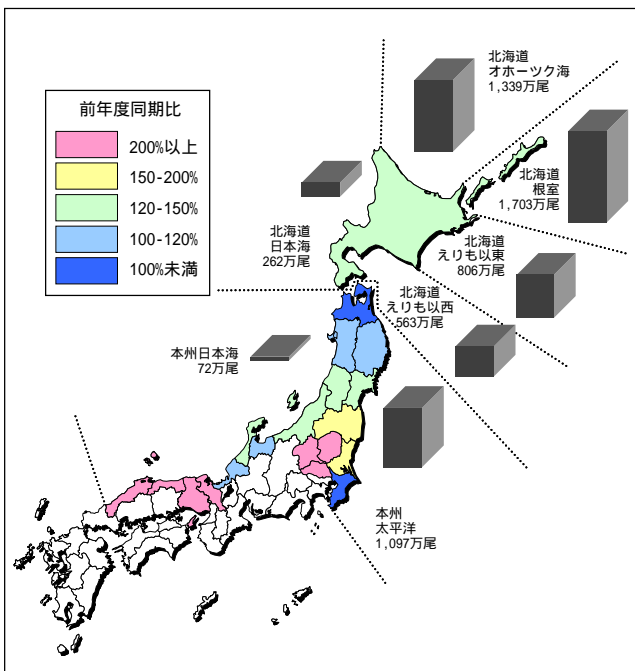
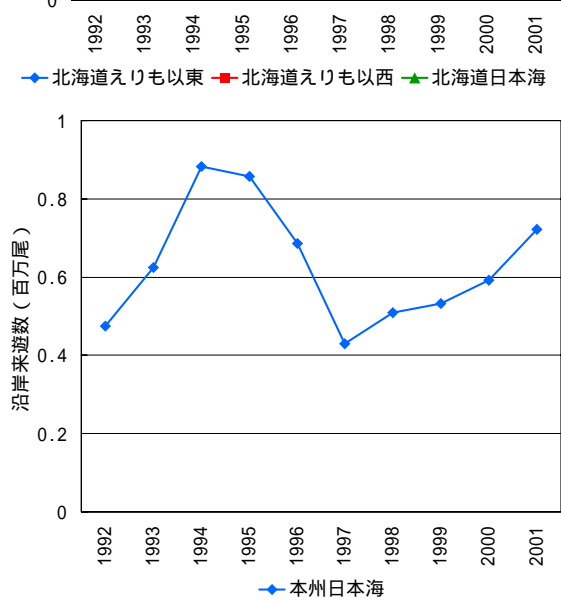
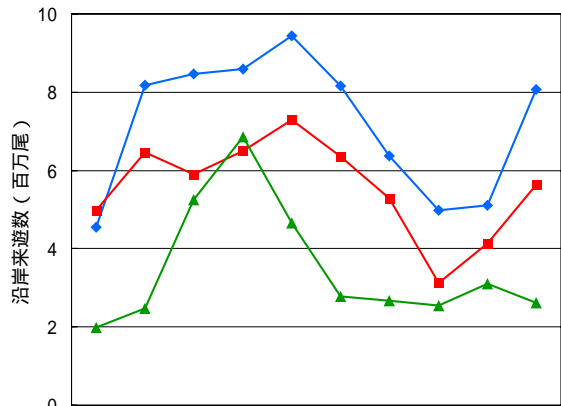
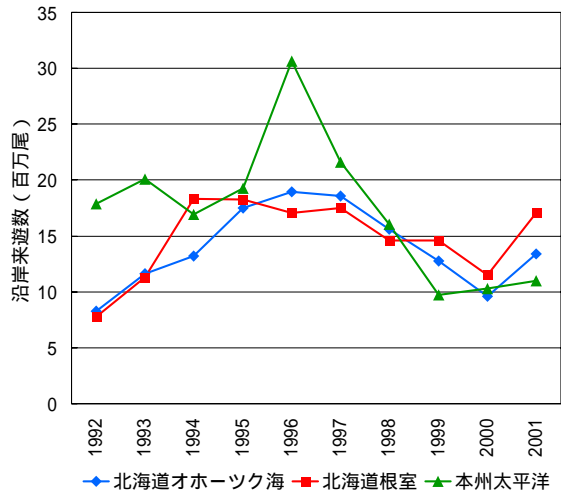


図3. 2001年12月31日現在の日本におけるサケの沿岸来遊数。直方体の高さは来遊数の相対的な大小、色分けは前年度同期比を示す。

図4. 最近10年間の日本におけるサケの海区別沿岸来遊数。2001年度は12月31日現在。

カラフトマス

主産地である北海道における2001年度沿岸来遊数は400万尾にとどまりました。カラフトマスの沿岸来遊数は1991年以降急増するとともに、1991年以後の偶数年級群での平均が1,500万尾、奇数年級群のそれは800万尾で、両者には2倍近い開きがあります。2001年度は不漁年にあたりますが、そのなかにあっても非常に低水準といわざるをえません。なお、採卵数は1億7,000万粒でほぼ前年と同数なので、放流数も前年並みの1億4,000万尾程度と見込まれます(図5)。

サクラマス

2001年度の北海道における河川捕獲数は4,100尾で、前年度の1/3ほどでしかありませんでした。このため採卵数も240万粒にとどまっております。放流数の大幅減は避けられない状況です。なお、本州の資源については現在調査中です(図6)。

ベニザケ

当センターでは北海道の3河川でベニザケの人工ふ化放流に取り組んでいますが、2001年度の河川捕獲数は前年度の16%、130尾にとどまりました。このため採卵数も7万粒に過ぎず、不足する種苗については支笏湖産ヒメマス卵10万粒をもって補てんすることとなりました。近年は残念ながら1990年代前半に比べると少ない状態が続いています(図7)。

放流数の年度区分

放流数に用いる年度区分については、通常用いられている、3月末で区切る会計年度とは期間が異なります。サケの場合を例にとると、親魚の回帰時期は8月から2月にかけてで、この親魚から得た種苗は翌年の1月から6月にかけて放流されます。サケの人工ふ化放流は親魚の捕獲を起点として、その親魚から得た種苗を放流し終えるまでを一つの周期としているため、「2001年度の沿岸来遊数」は2001年8月から2002年2月にかけて来遊した尾数を指しますが、「2001年度の放流数」の場合は2002年1月から同年6月までに放流された尾数を指しており、会計年度でいうところの2002年度に放流した分も一部含まれています。

なお、NPAFCの統計の場合は漁獲も人工ふ化放流も年、すなわち1月から12月までを単位とすると定められています。このため本稿では、NPAFCの資料を使用する北太平洋の漁獲数、放流数については「年」、日本の来遊数、放流数等については「年度」と使い分けており、例えば2000年と2000年度の放流数は一致しないのでご注意ください。

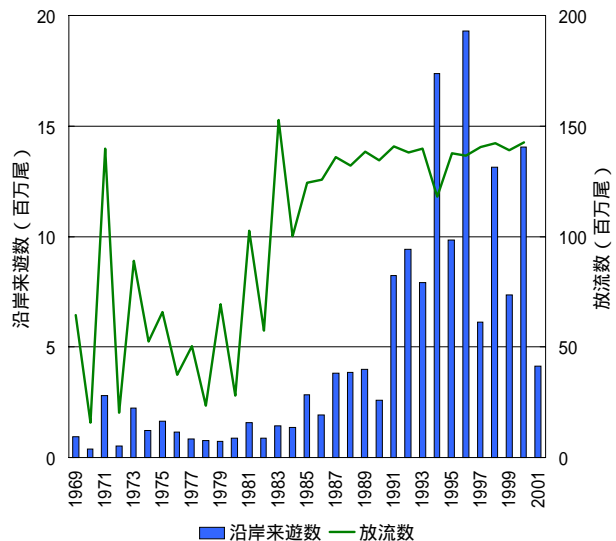


図5. 1969-2001年度の日本におけるカラフトマスの沿岸来遊数と人工ふ化放流数。2001年度は概数。

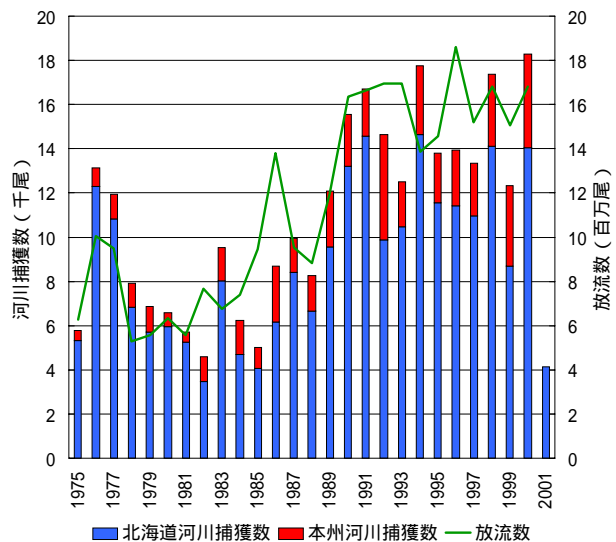


図6. 1975-2001年度の日本におけるサクラマスの河川捕獲数と人工ふ化放流数。2001年度は概数。

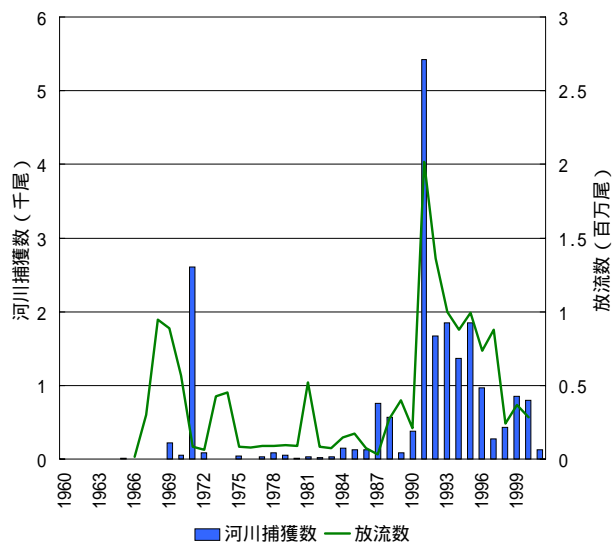


図7. 1960-2001年度の日本におけるベニザケの河川捕獲数と人工ふ化放流数。